

企業の不祥事とロータリアンの責務

世の中の不祥事は後を絶ちません。一つの事件をマスコミが報じれば、その余韻が冷めやらないうちに次の事件が起こっているようです。私たちは自分に貸与された職業分類の代表者としてロータリークラブに属している関係上、最も大きな関心事は事業上起こる不祥事です。企業の不祥事がマスコミに報道されるたびに、どうかロータリアンでないようにと祈りながら全国会員名簿を検索するのは私だけではないと思います。そして残念なことにはその名前を全国会員名簿に発見することも多くなりました。

談合、贈収賄といった不公正競争は後を絶ちません。企業倫理の高揚を説いても、構造的なものだから個人としては如何とも仕様がなくて開き直る人さえいます。

賞味期限や原材料を改ざんしたミルク・菓子・食肉会社の虚偽表示や隠蔽事件がマスコミを賑わしました。記者の質問にしどろもどろの口調で弁明する食肉会社の社長の襟に歯車のエンブレムを見たときには、思わず絶句しました。40代からロータリーに入った20年選手であり、2003年にはクラブ会長を勤め、現在はロータリー情報委員長だとのこと。息子に真実を語るように諭されて初めて罪を認めたという報道を聞き、元会長が息子から四つのテストを試されたという腹立たしさを感じた事件にでした。

エンロン事件の教訓も活かされることなく、社会に奉仕するために職業が存在することを忘れた金の亡者どもが虚業に群がって、自己の利益を追求するために株式の不正取引や会社乗っ取りにうつつを抜かしていることは、ライブ・ドアや村上ファンドの例がそれを物語っています。

ロータリーの職業奉仕の実践方法も、第一次産業、第二次産業、第三次産業がバランスよく機能していた時代に構築されたまま進歩がなく、最近の急激な産業構造の変化に対応できないままで、第三次産業、それも通信・情報・金融といったサービス業が突出した時代に入ってしまった。額に汗して働くことを前提にして構築した職業奉仕の実践方法を、どのようにしてペーパー商法の時代に適用させるのでしょうか。

何が実業で何が虚業かが判らなくなりつつある今こそ、謙虚な気持ちで、再度シェルドンの職業奉仕理念を思い起こしてみる必要があるのではないのでしょうか。職業奉仕理念は哲学であり、万古不易なものです。しかし職業奉仕の実践方法は事態の変化に応じて変えていかなければならないのです。ロータリーが職業奉仕理念と実践方法とを混同して、完成されたものと錯覚して放置してきたことが大きな問題なのです。

会社を立ち直らせるためのM&Aは実業だとしても、自らの利益を追求するためのM&Aが虚業であることは、いまさらスチール・パートナーズに対する東京高裁の判断を仰がなくても、100年も前からロータリーの職業奉仕理念で述べられている原則なのです。

不祥事を起こす本人が悪いのは当然ですが、そのような人を出したクラブにも大きな責任があります。クラブの中に真の親睦が存在すれば、またクラブの中にどんなことでも相談できる雰囲気があれば、その不正行為を思い留まらせることが可能であったはずです。すなわちそのクラブには真の親睦が存在しなかったことを証明しているのです。親睦の存在しない組織では、保身のためにお互いが悪い意味でかばいあい、往々にして悪貨が良貨を駆逐し、腐った林檎がまわりの林檎を腐らせるものです。

数年前ロータリークラブの会員が引き起こした少女買春事件では、マスコミが「ロータリーがロリータ」と大々的に報じましたが、今回の食肉事件では、ロータリー・エンブレムがはっきりとテレビに映し出されたにも関わらず、ロータリーが表に出てきませんでした。ロータリーを表に出してもニュース・バリューがあがらない存在になってしまったのかも知れません。情けないことです。

ロータリアン以外の同業者が起こした不祥事だとして、ロータリアンが責任を脱がれるわけにはいきません。ロータリアンがその職業分類の代表として業界に派遣されている以上、同業者が不祥事を起こすことは、職業分類の代表者として業界にその影響力を及ぼさなかったことを意味するからです。その身を挺してでも不祥事を阻止する責任があるのです。その業界の構造的な慣習だとしても、その慣習を改める努力をする義務があるのです。私個人ではどうにもならないとして、責任を回避するのなら、その職業分類を返上してロータリークラブを退会するくらいの覚悟が必要なのです。ほとんどの業界にはロータリアンが派遣されています。そのロータリアンの全てが業界を肅清する努力をすれば、企業の不祥事は決して起こらないはずです。

2007年7月22日